

外研

日语分级读库



にほんご よむよむ文庫

Vol.2 4 9

もり おう がい たん べん しゅう
森鷗外短編集

たか せ ぶね さいご いっく
高瀬舟／最後の一句



日本NPO法人 日本語多読研究会
森 欧外 (日) 原著
栗野 真纪子 (日) 缩写
早川 修 (日) 插图



2008

外研

日语分级读库



にほんご よむよむ文庫

Vol.2 4 9

もり おう が い た ん べ ん し ゅ う
森 鷗 外 短 編 集

た か せ ぶ ね
高 瀬 舟

江苏工业学院图书馆

藏 书 章

日本NPO法人 日本語多読研究会 主编

森 鷗 外 (日) 原著

栗野 真紀子 (日) 缩写

早川 修 (日) 插图

外语教学与研究出版社

北京

京权图字：01 - 2008 - 1939

© Originally Published by ASK Publishing Co., Ltd., Tokyo Japan

图书在版编目(CIP)数据

外研日语分级读库. Vol. 2. 4. ⑨ / 日本NPO法人日本語多読研究会主编. —
北京：外语教学与研究出版社，2008. 11
ISBN 978 - 7 - 5600 - 7956 - 1

I. 外… II. 日… III. 日语—语言读物 IV. H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 178421 号

出 版 人：于春迟

责任编辑：王晓静

装帧设计：王 军

出版发行：外语教学与研究出版社

社 址：北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址：<http://www.fltrp.com>

印 刷：北京国邦印刷有限责任公司

开 本：880×1230 1/32

印 张：1.375

版 次：2008 年 12 月第 1 版 2008 年 12 月第 1 次印刷

书 号：ISBN 978 - 7 - 5600 - 7956 - 1

定 价：36.90 元 (全五册)

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话：(010)88817519

物料号：179560001

日本語を勉強しているみなさんへ

「にほんごよむよむ文庫」は、

日本語を勉強しているみなさんのための「読みもの」シリーズです。

楽しみながらたくさん読んでください。

やさしいものからたくさん読むと、知らないうちに漢字の読み方や言葉が身につきます。
読んだ話をCDでも聴いてみてください。読みながら聴いてもいいでしょう。

目からも耳からもどんどん日本語を吸収しましょう！

「にほんごよむよむ文庫」4つのルール

- 1 やさしいレベルから読む。
- 2 辞書を引かないで読む。
- 3 わからないところは飛ばして読む。
- 4 進まなくなったら、他の本を読む。

これは、今から二百年以上前の話である。その頃、人を殺す、家を焼くなどの重い罪を犯した罪人は、死刑になったり、遠くの島に送られたりした。島に送られた罪人は、死ぬまでそこで暮らさなければならなかった。

京都に高瀬川という川があった。その川には、島に送られる罪人を乗せる高瀬舟が行ったり来たりしていた。罪人は、まず京都でこの舟に乘せられて、大阪まで運ばれるのである。

庄兵衛は、高瀬舟で罪人を運ぶ仕事をしていた。罪人が京都で舟に乘せられるとき、家族が一人だけ、一緒に舟に乘ることができた。罪人は、大阪に着くまで家族といろいろな話をする。これが、家族との最後の別れになる。「どうしてあんなことをしてしまったんだろう」「これから私はどうなるんだろう」と、罪人は泣きながら、家族といつまでも話し続けるのだった。

ある春の夕方のことである。庄兵衛は、喜助という三十歳ぐらいの男を舟に乘せた。やせて色の白い男だった。喜助は家族がいないので、一人で舟に乘った。

喜助の罪は、弟を殺したことだった。罪人は、たいてい舟の中で泣くが、喜助は違っ

た。喜助は、黙つて静かに月を見ていた。顔は明るく、目はキラキラ光っている。庄兵衛がいなかったら、歌でも歌い出しそうだ。庄兵衛は不思議だった。

——変だな。この男は、他の罪人とは全然違う。どうして、こんなに明るい顔をしているんだろう。自分の弟を殺しても何も思わない悪人なのだろうか。いや、そんなに悪い人間には見えない——

庄兵衛は、喜助の横顔を見ながら、ずっと考えていた。しかし、考えれば考えるほど、わからなくなつた。しばらく経つて、とうとう庄兵衛は喜助に聞いた。

「喜助、おまえは何を考えているのか」

喜助は「はい」と答えて、座り直して庄兵衛の顔を見た。庄兵衛は言葉を続けた。

「私は、これまでたくさんの罪人を舟に乗せたが、たいいの罪人は、夜中泣いて悲しがる。でも、おまえは島へ行くのが嫌ではないようだ。おまえは島へ行くことをどう思っているのだ？」

喜助は、にっこり笑って答えた。

「島へ行くのが悲しいという人は、それまでの生活が楽しかったからでしょう。私は、これまで大変苦しい生活をしてきました。どこへ行っても、これ以上苦しい生活はないと思います。島のほうがきつと楽しいだろうと思うのです。それに、今まで私は、仕事があるところへは、どこへでも行って働きました。一つのところに長く住んだことはありません。でも、今度は島にいろ、と言われました。やっと住むところができたので、うれしいのです。その上、島の生活のためのお金までいただきました。ここにございます」



喜助はこう言つて、着物の胸のところに手を置いた。そして、また言つた。

「私の両親は、ずいぶん前に病気で死んでしまいました。弟と私は、親切な村の人に世話をしてもらつて、今まで生きることができました。小さいときから、いろいろな家の手伝いをしながら一日一日生きてきましたが、一度も自分のお金を持つたことはありません。お金を借りてその日の食べ物を買う。そして、働いてそのお金を返す。また食べ物を買うためにお金を借りる。毎日このようにして生きてきたのです。」

ところが、罪人になつてからは、働かないのに毎日食べ物をいただきました。住むところも、お金もいただきました。自分のお金を持つのは初めてのことです。本当にこんなに親切にしてくださいなのでしょうか。私は本当にうれしいのです」

「そうか」

庄兵衛は喜助の答に驚いて、これだけ言つと黙つてしまった。そして、考え込んだ。

——喜助は働いて金をもらつても、すぐまた、その金はなくなつてしまふと言つた。自分も喜助と少しも違わない。自分は、妻と四人の子どもと母の七人家族である。

自分は喜助よりたくさん金をもらうが、もらった金を七人の家族のために使つて、後には少しも残らない。そして、また働いてお金をもらつて、家族のために全部使う。喜助と同じだ。

でも、気持ちはどうだろう。喜助は、毎日一生懸命働いて、やつと食べ物やお金を手に入れるという生活をしてきた。そして、罪人になつてからは、働かないで食べ物やお金がもらえることに驚いて、それを心から喜んでゐる。しかし、自分は、自分の生活に満足したことは一度もない。心の中では、妻が金を使いすぎることを不満に思つたり、仕事がなくなつたらどうしよう、病氣になつたらどうしようと不安に思つてゐる。どうして喜助のような氣持ちになれないのだろう――

庄兵衛は、人の生き方を考えてみた。

――人は病氣になれば、病氣がなかったらいいと思う。ご飯が食べられなければ、ご飯があればいいと思う。金がなければ、金を欲しがる。金があつても、もつとたくさん欲しくなる。人はどこまでいつても欲しいという氣持ちを捨てられない。だから、少しも楽しくなれない。

しかし、喜助には、もつと欲しい、もつと欲しいという気持ちがない。だから、少しの金でももらえば、それに満足して心から喜ぶことができるのだ。それは、普通の人にはなかなかできないことだ。喜助は特別な人なのだ――

庄兵衛は、喜助の横顔を見た。静かに月を見ている喜助は光に包まれているようだった。

「喜助さん」

庄兵衛は、今度は「喜助」ではなくて、「喜助さん」と呼んだ。喜助は、そう呼ばれて少し驚いたようだった。

庄兵衛は続けて言った。

「お前が島へ行くのは、弟を殺したからだと聞いた。どうして殺したのか、その訳を聞かせてくれないか」



「はい、わかりました」

喜助は、小さい声で話し始めた。

「自分でも、どうしてあんなことをしてしまったのかわかりません……。去年の秋、弟が重い病氣になって、働けなくなってしまったのです。私が仕事に出かけて、夕方、食べ物を買って家に帰ると、弟はいつも、『兄さん一人に働かせてすみません』と言っていました。

ある日、いつものように私が仕事から帰って家の戸を開けると、弟が『痛い、痛い』と言いながら、布団の上に倒れていました。私がびっくりしてそばに行くと、弟の首から血がたくさん流れていました。のどに剃刀が刺さっていました。弟は苦しそうに言いました。

『兄さん、ごめんなさい。私の病氣は、もう治らないのだから、早く死んだほうがいいと思つたのです。兄さんをこれ以上、私のために働かせたくない……。のどを切ったら、すぐ死ねるだろうと思いました。でも、うまく切れなくて……。痛い、痛い。兄さん、お願いだ。この剃刀を強く引いて。そうしたら死ねますから……』



私が『医者いしやを呼よんでくる』と言いうと、
弟おとうとは、とても恐こわい目めで私わたしを見みました。そ
して、『医者いしやが来きても、何なんの助すけけにもなり
ません。ああ、苦くるしい。早はやく』と言いうので
す。私わたしはどうしたらいいのかわからなく
て、弟おとうとの顔かおばかり見みていました。『早はやくし
ろ、早はやくしろ』と、弟おとうとの目めが言いっています。
弟おとうとはとても苦くるしそうで、だんだん声こえも出で
なくなりました。

私わたしは、とうとう弟おとうとの言いうとおりにして
やろうと思おもいました。そこで、『しかたが
ない。引ひいてやろう』と言いうと、弟おとうとは、
うれしそうな目めで私わたしを見みました。

私が力を入れて、のどの剃刀を引いたちようどそのとき、隣の家のおばあさんが家に入ってきました。私が留守の間、弟の世話をしてくれるように頼んでいたおばあさんです。おばあさんは、私たちを見て『あつ』と言って、外へ走っていききました。私は剃刀を持ったまま、おばあさんが出ていくのをぼんやりと見ていました。弟を見ると、弟はもう死んでいました』
喜助は話し終わると、下を向いた。

庄兵衛は、どう考えたらいいのかわからなくなりました。

——これは本当に罪なのだろうか。弟を殺したことになるのだろうか。

弟は、喜助が剃刀を引かなくても、死んでしまっただろう。弟が、早く剃刀を引いてくれ、と言ったのは、苦しかったからだ。喜助は、弟をその苦しみから助けたいと思って、剃刀を引いてやったのだ。これが本当に罪と言えるのだろうか。喜助は本当に島に送られなければならないのだろうか。——

いくら考えても庄兵衛にはわからなかった。

月の夜は、だんだん
深くなつていく。二人
を乗せた高瀬舟は、黒
い水の上を静かに進ん
でいった。

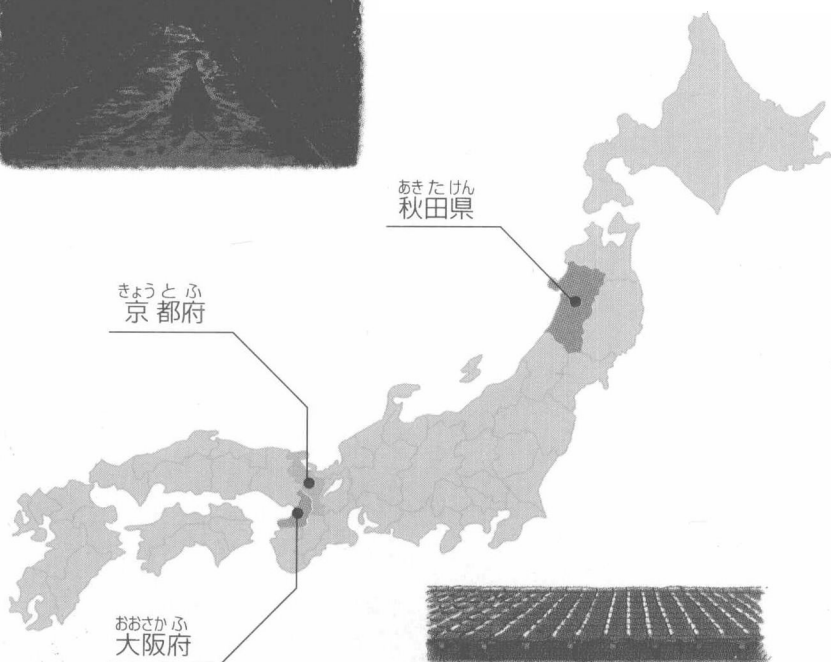


たか せ ぶ ね
●「高瀬舟」

きょうと ふ 大阪府
■ 京都府 ■



さくひん
作品の
ぶたい
舞台



●「最後の一句」

おおさか ふ あきた けん
■ 大阪府 ■ 秋田県



もり おう がい たん べん しゅう
森 鷗外 短編集
さい こ いっ く
最後の一句

日本NPO法人 日本語多読研究会 主编
森 欧外（日） 原著
栗野 真纪子（日） 缩写
早川 修（日） 插图

いま 今から二百五十年以
にひやくごじゅうねんい
じようまえ 上^え前^ど、江戸時代^{じだい}の中頃^{なかごろ}
のこ^ことである。場所^{ばしょ}は大^{おお}
阪^{さか}。ある日^ひ、桂屋^{かつらや}太郎^{たろう}
兵衛^{べえ}を死刑^{しけい}にする、と書^か
かれた札^{ふだ}が町^{まち}に立^たてられ
た。太郎^{たろう}兵衛^{べえ}は、船^{ふね}で
物^{もの}を運^{はこ}ぶ仕事^{しごと}をしてい
る男^{おとこ}であつた。その日^ひ、
町^{まち}の人々^{ひとびと}は、この話^{はなし}ば
かりしていた。

